忘れることのないように

沖縄県立開邦中学校二年　宮城　莉子

忘れられない
母に手をつながれて
何も知らずに笑う私が
仰いで見た兄の背中
親族皆が兄を見送り
「万歳、万歳」と笑った駅
その声に応えるようなあの
誇りと、期待と、不安と、
たくさんのものを背負った背中を
私は忘れることができない

忘れられない
学校での訓練に疲れ
妹と眠りこけていた私を
叩き起こしたサイレンの音
妹の手をがむしゃらに引き
死に物狂いで壕へ走る
騒ぎの中で聞こえるあの
悲鳴、泣き声、怒鳴り声、
その全てをかき消して鳴る警報の音を
私は忘れることができない

忘れられない
徴兵検査に合格し
戦地へと旅立つ私に
母が作ってくれた握り飯
配給でもらったわずかな米に
添えられた手製の漬け物
列車の中で食べたあの
祈りと、願いと、愛情と、
いつもより少し塩辛い漬け物の味を
私は忘れることができない

忘れられない
爆弾が肩をかすって
壕で処置をしてもらう私に
女学生が向けた微笑み
負傷兵のうめきと様々な悪臭
あまりにも頼りないろうそくの明かり
看護する女学生のあの
恐怖と、疲労と、嘆きと、
それらを抑えて浮かべる微笑みを
私は忘れることができない

忘れられない
かろうじて生きのび
故郷へと帰った私に
仲間の母がかけた言葉
「なぜあなただけ
私の息子を返して」
私を睨みつけるあの
痛みと、叫びと、羨望と、
底知れぬ絶望に満ちた声を
私は忘れることができない

わたしは知らない
家族を戦地へ見送る駅を
大きな不安で眠れぬ夜を
生きていることを責められる辛さを
一生を終えるその時まで
忘れることのできない苦しみを

知らないわたしたちは
気づかないといけない
家族と共に過ごし
夜にぐっすりと眠り
心から笑い
堂々と生きる権利を得られる
この「日常」が当たり前ではないことに

わたしはこのことに気づくたび
深く感謝をするだろう
当たり前でないことを
当たり前のようにできることが
どれほど幸せか
わたしたちの「日常」を望んだ人が
どれほどの数いたことか

伝えよう
七十六年前
戦争という恐怖を生きた人がいたことを
「日常」を味わえない惨禍があったことを

今も　これからも
忘れることのないように

生きていこう
戦争というものを
「日常」への感謝を
周囲の人への愛情を
生きられることの幸せを
忘れることのないように